

2012年4月24日 公の精神でつながるコミュニティー「一志会」の第9回例会が開催されました。



「公の精神」をもって積極的に社会との関わりをもっていこうとの想いを共有する大企業経営者の会員制”コミュニティー”である「一志会」の第9回例会を、4月24日に開催しました。

今回は、混迷を深めている政治情勢の中で「今、田中総理大臣がいたらどう決断し、舵取りをするだろうか」と世間で再び注目されている田中角榮総理大臣の秘書官として仕えた小長啓一氏（財団法人経済産業調査会会長、元通商産業事務次官）をゲストにお迎えしましたので、どのようなお話しを伺えるのか、という期待の中で進められました。



小長氏は、1971年に田中角榮氏が通産大臣に就任したときに秘書官となり（ちなみに、一柳は秘書としてその下で働いていました）、翌年には総理大臣秘書官として通算3年半、大臣と身近に接してきた方ですが、「政治家・田中角榮論」と題して、「構想力・決断力・実行力・人間的魅力」という切り口で実に興味深いお話しをされました。

通産大臣就任後に、小長氏は大臣の意向を受けて「日本列島改造論」のとりまとめの中心的役割を担いましたが、そこには”明治100年”を迎えて一極集中から均衡ある国土発展への転換という大臣の大きな構想があったこと、また積年の懸案であった日米繊維交渉では国益全体の視点に立って自主規制を受け入れると共に、関連業界へのきめ細

かな配慮を講じる決断力と実行力を発揮して、交渉を見事にまとめたことに、国のリーダーとしての非凡さを感じたとのことでした。圧巻は、総理大臣就任と同時に取り組んだ「日中国交回復交渉」での周恩来首相との息詰まるような厳しい交渉の中で、一步もたじろぐことなく相手の立場を考慮しながらも日本の立場を堂々と主張し、最後はトップ二人の信頼関係を築き、交渉を取りまとめた場面を生々しくお話しされました。また、その過程では、随行した役人への気配りぶりに関係者が心服したエピソードも印象的でした。

何よりも、政治家「田中角榮」は、若いときから地べたで辛酸を舐めて人間関係の機微を心得ており、また大変な勉強家で、2年生議員の時に「道路特定財源制度」を議員立法で実現させ、その後のわが国の道路整備を飛躍的に推進させると共に高度成長のベースを作ったことに代表されるように、政治家として「72本の議員立法」を実現したことは、極めて希有なことであり、その構想力、実行力を今の政治家も少しは見習って欲しい、と話されました。

今回のお話しには、固唾を飲んで拝聴するという雰囲気、皆、一様にリーダーとしてのスケールの大きさに圧倒された印象でした。



メンバースピーチでは、メンバーから経営課題の材料を提供して貰い、参加者で率直な意見を交わして切磋琢磨し、各自の経営に活かそうということで、今回は資生堂の高重執行役員（経営企画・総務担当）から、国内では圧倒的な強さを誇る老舗（創業140年）にとって、国内市場の伸び悩み、海外市場、とりわけ新興市場への積極展開という中長期的展望とその実現のための課題についてお話しを頂きました。これに対して、メンバーからは、環境変化への弾力的対応をどう図っていくべきか、などとの質疑が交わされ、お互いに学ぶところが多かったと思います。



また、会の半ばでは、新規メンバー4名（日本政策投資銀行・菊池執行役員、島精機製作所・島専務取締役、蝶理・降矢執行役員、JPホールディングス・山口社長）の自己紹介が行われるとともに、懇談タイムではゲストの小長氏を囲んでの交流で大いに盛り上がりました。

